

[上映スケジュール]

4/4 (金)	16:30	勇者に休息なし <i>Pas de repos pour les braves</i> (107分)
	19:00	運命のつくり方 <i>Un homme un vrai</i> (120分)
4/5 (土)	12:30	キング・オブ・エスケープ <i>Le Roi de l'évasion</i> (93分)
	15:00	描くべきか愛を交わすべきか <i>Peindre ou faire l'amour</i> (100分)
	17:30	垂直のまま <i>Rester vertical</i> (100分)* 上映後、アラン・ギロディ監督とのオンライントークあり Suivi d'une discussion en ligne avec Alain Guiraudie
4/6 (日)	12:15	パティエとの二十一夜 <i>21 nuits avec Pattie</i> (115分)
	15:00	勇者に休息なし <i>Pas de repos pour les braves</i> (107分)
	17:30	トラララ <i>Tralala</i> (120分)* 上映後、ジャン＝マリー・ラリュエ監督とのオンライントークあり Suivi d'une discussion en ligne avec Jean-Marie Larrieu
4/11 (金)	16:30	キング・オブ・エスケープ <i>Le Roi de l'évasion</i> (93分)
	19:00	パティエとの二十一夜 <i>21 nuits avec Pattie</i> (115分)
4/12 (土)	16:00	描くべきか愛を交わすべきか <i>Peindre ou faire l'amour</i> (100分)
	18:30	運命のつくり方 <i>Un homme un vrai</i> (120分)
4/13 (日)	15:30	トラララ <i>Tralala</i> (120分)
	18:15	垂直のまま <i>Rester vertical</i> (100分)

入場料金：一律1,100円 \*の付いたオンライントーク付の回のみ1,500円 (全席自由 / チケット番号順)  
Peatix (<https://ifjtokyo.peatix.com/events>)にて発売中。  
窓口販売はございませんのでご注意ください | 上映開始15分前開場 | 上映開始10分後以降の入場はご遠慮下さい



〈特集上映〉

## アラン・ギロディ監督特集

現代フランスを代表する異才、アラン・ギロディ監督の長編3作品が「日本劇場初公開」決定!!

『ミゼリコルディア』

『ノーバディーズ・ヒーロー』

『湖の見知らぬ男』

3月22日

シアター・イメージフォーラムほか全国公開



アラン・ギロディ&アルノー&ジャン＝マリー・ラリュエ特集  
欲望の領域

主催・会場：東京日仏学院 | 助成：CNC

協力：コープロダクション・オフィス、イメージ・フォーラム、国立映画アーカイブ、ピラミッド・インターナショナル、ザ・ビュロ・セールズ、ザ・フェスティバル・エイジェンシー

Films d'Alain Guiraudie et d'Arnaud et Jean-Marie Larrieu  
Territoires du désir

Organisé par l'Institut franco-japonais de Tokyo, avec le soutien du CNC | Remerciements: Coproduction Office, Image Forum, National Film Archive of Japan, Pyramide International, The Bureau Sales, The Festival Agency

[会場・お問い合わせ]

東京日仏学院

〒162-8415 東京都新宿区市谷船原町15

TEL 03-5206-2500 / FAX 03-5206-2501

@institut\_tokyo X @institut\_tokyo f @instituttokyo LINE @355jiuao



Rester vertical ©DR

ALAIN GUIRAUDIE

アラン・ギロディ&  
アルノー&ジャン＝マリー・ラリュエ特集

## 欲望の領域

FILMS D'ALAIN GUIRAUDIE ET D'ARNAUD ET JEAN-MARIE LARRIEU

# TERRITOIRES

# DU DÉSIR

2025/ 4/4 (金) — 13 (日)

\*金・土・日の開催

主催・会場 東京日仏学院エスパス・イマージュ  
du 4 au 13 avril 2025 à l'Institut français de Tokyo



JEAN-MARIE LARRIEU

Un homme un vrai ©DR



アラン・ギロディ、そしてアルノー&ジャン=マリー・ラリューの3人は1960年代半ばに生まれ、いずれもフランス南西部出身で、90年代に短編作品で頭角を現し始め、その10年後、アラン・ギロディ監督は『動き出すかつての夢』(2001)、ラリュー兄弟は『夏の終わり』(1999)でブレイクを果たします。その後、ラリュー兄弟は『描くべきか愛を交わすべきか』(2005)、アラン・ギロディは『キング・オブ・エスケープ』(2009年)などで第一線の監督としての地位を確立します。しかし、3人の監督たちを結びつけるのはそうした経歴の類似性以上に、映画に対する独創的な概念でしょう。欲望、セクシュアリティにそれぞれ真摯かつ独特なアプローチで探求し、それらを原動力として逃走線を引きながら、あらたな結びつきや共同体を生み出していく彼らの映画はつねに私たちを驚かせ、楽しませてくれます。最新作『ミゼリコルディア』ほか3作品が一挙劇場公開するアラン・ギロディ監督の過去の3作品、そしていま最も日本公開を期待したいラリュー兄弟の3作品を併せて紹介します。4/5(土)はアラン・ギロディ監督、4/6(日)ジャン=マリー・ラリュー監督とのオンライントークを予定しております、お楽しみに！

## アラン・ギロディ監督作品 Films d'Alain Guiraudie



©DR



©DR



©DR

### 勇者に休息なし *Pas de repos pour les braves*

[2003年/フランス=オーストリア/107分/カラー/35mm]

出演 トマ・シュエール、トマ・ブランシャール、ローラン・ソフィアティ

青年バジルは夢で「ファフタオ・ラボ」を見たことを語る。それは最後から二番目の眠りでその後に死が訪れる徴だという。お金がなく退屈している学生イゴール、ジャーナリストで探偵で(?)、かなりのごろつきジョニー。それぞれ境遇は違いながらも、ふたりはバジルの打ち明け話に強く惹きつけられ、姿を消してしまったバジルの行方を追うことに…。「白昼夢のような映画を創り出すギロディは、故郷のフランス南西部の土地を、遊び心をもって映画的な場所へと変化させていく類まれな才能を持っている」——ジャン=ミシェル・フロドン「カイエ・デュ・シネマ」

[国立映画アーカイブ所蔵作品]

### キング・オブ・エスケープ *Le Roi de l'évasion*

[2009年/フランス/93分/カラー/35mm]

出演 リュドヴィック・ベルティヨ、アミア・エルジ、ピエール・ロール

43歳の農機具セールスマンアルマンは独身のゲイで、人生にうんざりしている。そんなある日、勇敢なる10代の少女カルリに会う。ふたりはさまざまな人に追われ、あらゆる危険に抗いながらも、許されぬ愛を貫こうとする。しかし、これは本当にアルマンが夢見たことなのだろうか?カンヌ国際映画祭監督週間部門出品。

「『キング・オブ・エスケープ』を見終わった私たちは、あらゆる身体に欲望を感じるようになった不思議な気持ちで劇場を後にするだろう」——ユジュニオ・レンジ「カイエ・デュ・シネマ」

[国立映画アーカイブ所蔵作品]

### 垂直のまま *Rester vertical*

[2016年/フランス/100分/カラー/デジタル]

出演 ダミアン・ボナル、インディア・エール、クリスティアン・ブイエット

脚本家のレオは高原で狼の狩りをしているとき、羊飼いのマリーに出会う。二人の間に子供が生まれるが、マリーは自由奔放なレオを置いて、ある日、家を出て行く。「『垂直のまま』の企てとは、人間の不可思議な関係性についての感触を拡散してみせることではないだろうか。カンヌ国際映画祭コンペティション部門出品。

「そう、愛は創り直されるべきだ」(ランボー)。しかしさらに先へ行くべきだ。もっと大きな何かを新たに生み出すべきだ、とギロディは語る。男同士、男と女、人間と子供、人間と動物、そして人間とブリミティヴなものとの間で」——J・ルバスティエ「カイエ・デュ・シネマ」

## アラン・ギロディ Alain Guiraudie

1964年フランス中南部、ミディ・ピレネー地方に位置する大自然に囲まれたアヴェロン県のコミュン、ヴェルフランシュ=ド=ルエルグで生まれる。その故郷を舞台に、現代の西部劇、あるいは哲学的寓話とも言えるジャンルの中で、官能的で独創的な作品を発表し続けている。1990年代から短編映画を撮り始め、2001年には2本の中篇『貧者に注ぐ陽光』と『動き出すかつての夢』を発表、後者でジャン・ヴィゴ賞を受賞し、ジャン=リュック・ゴダールからも賛美の言葉を得る。2003年に初の長編『勇者に休息なし』で現実と夢が混在する幻想的な世界での冒険活劇を描き、カンヌ国際映画祭監督週間でも上映される。2013年、カンヌ国際映画祭ある視点部門にて上映された『湖の見知らぬ男』が世界中で傑作と評され、『カイエ・デュ・シネマ』誌の年間ベストテンでも第1位に選ばれる。再び同誌年間ベストテン第1位に選ばれた最新作『ミゼリコルディア』はギロディの最高傑作の声も高い。

©Marie Rouge/Unifrance

## ジャン=マリー&アルノー・ラリュー監督作品 Films d'Arnaud et Jean-Marie Larrieu



©DR



©DR



©DR



© Jérôme Prébois / SBS Productions

### 運命のつくりかた *Un homme, un vrai*

[2002年/フランス/120分/カラー/35mm]

出演 マチュー・アマルリック、エレヌ・フィリエール、ピエール・ベレ

映画監督見習のボリスは、撮影中にキャリア・ウーマンのマリリンと出会い、恋に落ちる。5年後、ふたりは、子供たちと共に、マリリンの仕事の都合でバレアル島に移り住むが、ボリスは主夫業に嫌気がさし、マリリンはある女性に恋をして失踪してしまう。そしてさらに5年後…。ときにはミュージカル・コメディ風、ときには野鳥についてのドキュメンタリー風、ときにはメロドラマ風と、シーンごとに様々なジャンルが魅力的に織り交ざっている作品。フランス・ポップ界の鬼才フィリップ・カトリーヌがラストで生の歌声を響かせてくれる。

[国立映画アーカイブ所蔵作品]

### 描くべきか愛を交わすべきか *Peindre ou faire l'amour*

[2005年/フランス/100分/カラー/35mm]

出演 ダニエル・オートウイク、サビーヌ・アゼマ、セルジ・ロベス、アミラ・カサル、フィリップ・カトリーヌ

長年連れ添ってきた夫婦、ウィリアムとマドレーヌ。一人娘が家を出てから山の麓で2人静かに暮らしていた。絵を描くことが好きなマドレーヌは、ある日、繊細で教養のある盲目の男性アダムと恋人エヴァに出会う。やがて、アダムたちの家が火事で焼けてしまったことから2組のカップルは同居することになるのだが……。ジャン=ルノワールを思わせる大らかな官能性で欲望の衰えとそこへの回帰を描いた、光と闇の戯れが美しい作品。第58回カンヌ国際映画祭コンペティション部門出品。

[国立映画アーカイブ所蔵作品]

### パティエとの二十一夜 *Vingt et une nuits avec Pattie*

[2015年/フランス/115分/カラー/デジタル]

出演 イザベル・カレ、カリン・ヴィアール、アンドレ・デュソリエ、セルジ・ロベス、ドゥニ・ラヴァン、マチルド・モニエ

盛夏。キャロリーヌは疎遠であった母が亡くなったと報せを受け、パリから南仏の小さな村に赴く。母が遺した家に着くと、管理人のパティエが出迎えてくれた。ふたりで散歩に出かけるが母の話もそこそこに、パティエは自分の性生活を赤裸々に語りはじめ、奥手のキャロリーヌは啞然とするばかり。そんな不思議な出会いのなか、母の遺体が消えてしまう…。女性たちの性の解放、エロスとタナトスへのおおらかな賛辞に満ちた作品。ドゥニ・ラヴァンをはじめとした個性的な俳優たちの共演を見るのも楽しい。

### トラララ *Tralala*

[2021年/フランス/120分/カラー/デジタル]

出演 マチュー・アマルリック、メラニー・ティエリー、マイウエン

パリの街角で歌手をしている40代のトラララは街である夜、美しい若い女性に出会う。彼女は彼にひとつの言葉を残し去っていく。「とにかく、自分自身であることをやめること」。パリを離れルルドに到着したトラララはある女性から行方不明になった自分の息子だと勘違いされ、その“役”を引き受けることに……。『素晴らしき放浪者』を想起させるアマルリックがバンジューで謳いながらコロナ禍のフランスを旅する。

「ラリュー兄弟のミュージカルはありえない「死者からの生還」を出発点に、“ファンファーレ”と共に真の出発を組織する」——シャロット・ガルソン「カイエ・デュ・シネマ」

## アルノー&ジャン=マリー・ラリュー Arnaud et Jean-Marie Larrieu

ピレネー山脈に囲まれたルルド生まれのジャン=マリーと弟アルノーは、16ミリフィルムで山岳映画を撮っていた祖父の影響で、幼い頃から映画への情熱を育んでいく。1980年代半ばから数本の短編を撮った後、初長編作品『夏の終わり』(1999年)を発表。2000年、中編映画『ローランの狭間で』で彼らの分身的存在となるマチュー・アマルリックと出会う。その4年後、再びアマルリックを主演に迎えた『運命のつくり方』(2002年)が映画ファンたちから熱狂的に受け入れられる。次の『描くべきか愛を交わすべきか』(2005年)がカンヌ映画祭のコンペティション部門に出品され、たしかな演出力でさらに高い評価を得る。ポストアポカリプスのな世界でアマルリックが駆け巡るロード・ムービー『世界の終りの日々』(2008)、スリラー『愛の犯罪者』(2013)、ミュージカル『トラララ』(2020)と、次々にあらたなジャンルに挑戦し続けるふたりの最新作は、故郷ジュラを舞台に父性をテーマにして撮った感動作『ジムの物語』(2024)。

©DR